



尻無川河畔 クブンガー（窪地）の説明を受ける参加者

沖縄タウン フィールドワークに参加して

部落差別人権担当司祭 長崎壮（クラレチアン宣教会）

イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、
その悩みを少しでも分かち合うことのできる
教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」
増補新版より



まんざもう おんなそん
万座毛＜恩納村＞

3月26日、大阪市大正区で部落差別人権委員会主催の沖縄タウン・フィールドワークが行われました。参加者の15人はなみはや教会に集合し、本土では沖縄出身者が一番多い地域といわれる大正区の沖縄移民の歴史に関連する場を巡り、日本人への同化と異化のはざままで揺れる葛藤の歴史を学びました。

沖縄移民にとってシンボリックな場所は尻無川河畔のクブンガー（沖縄語で窪地の意味）という場所です。本土の人に差別を受けた彼らがやむなく集合住宅を建設した低湿地帯で住居に適さない場所でした。劣悪な生活環境であったため、行政による強制立ち退き命令によって住民は追いやり、ここからほど近い市営の改良住宅に住まわされました。こういった点は部落差別における行政の対処の仕方と似ているのかもしれない。

この他にも私たちは沖縄移民の歴史を知るうえで欠かせない場を巡りました。沖縄移民への差別問題に長年取り組んでいる二人の方の話聞いたことはこの日の体験を深めるものとなりました。

フィールドワークの出発前には人権問題・差別問題と長年取り組んでこられた日本基督教団牧師の安田耕一さんから大正区へと移り住んだ沖縄移民の歴史的背景と現状について詳細に聞き、終わりに沖縄関係の資料館である関西沖縄文庫主催者の金城馨さんからお話を伺いました。金城さんの話で印象的だったのは、昔の沖縄人は日本人の考え方に迎合して生きるしか術はなかったが、彼自身は「沖縄人として日本人を生きる」ということを信条にしているということでした。

おりしも当日は、ウクライナ危機が連日新聞やニュースを騒がせていた時期であったため、金城さんの「ウクライナはロシアに組み込まれたくないという心情は沖縄人にとっての日本人に対する心情と同じこと」との言葉には説得力があり、皆が共感しました。

異文化交流には葛藤はつきものですが、その中にある相手の文化的背景、その大切さを学べたフィールドワークになりました。

正義と平和協議会全国集会大阪大会 2021 分科会主催者より

第3分科会

構造的差別……沖縄基地

梶原隆憲（堺教会信徒）

「正義と平和全国集会 2021 大阪大会」の第3分科会「沖縄の米軍基地を考える」で発題し、学びの講演者を大正区「関西沖縄文庫」を拠点に活動されている3人にお願ひしました。

かつて100年前から大正区に移住してきた沖縄人は、住居や職探しで差別され苦難を強いられました。その少し前、1903年に大阪で開かれた内国勸業博覧会で、台湾人やアイヌの人達と同様に見世物として展示された「人類館事件」ではひどい侮辱を味わっています。

その様な差別的意識の中に本土と沖縄の関係はあります。「金城」という名は本土ではキンジョウと読みますが、沖縄ではカナグスクと呼びます。本土は文明が進んでいてスピーディ、故にその社会に組み込まれてはいけなひのか……。それは同化政策に似て、米軍基地の「沖縄に置く事をよし！」とする都合の良い多数派（本土側）の考えとしか言いようがありません。少数派の沖縄にとってはそうではないのです。

琉球併合、戦後の基地の沖縄への移転、1995年の少女暴行事件、「最低でも県外移設」等、薩摩侵攻から400年、沖縄に対する一連の歴史、また、遺骨の土砂を埋め立てに使う人道に欠ける行為、県民投票で反対が証明されても強行される辺野古基地建設……。構造的な差別が続いています。

講演者のお話を聞き参加者からは次のような感想が寄せられました。

＊我々は沖縄に甘んじていないか＊沖縄では基地の事件が多発しているのに本土メディアは取り上げない＊厚木基地とは住民の意識が異なる＊現地活動中「基地を一つ持って帰ってくられませんか！」と言われた事がある＊現状をもっと知る必要がある、自分の子どもにも伝えたい＊多宗教者の方と共に行動したい＊改善しない事で無力感を味わう＊国のねらいは、国民が黙ってしまう事＊やるしかない、何をやるか探し続ける事が大事＊もともと本土から移転されたもの、今度は沖縄から本土へ戻す番だ＊全ての教会が地元の議会に陳情すれば大きく広がる

現在、移転を考える私たちは都道府県・市町村議会に以下の内容で陳情書と意見書を送っています。

1. 沖縄を「捨て石」にした差別的な安全保障政策をやめること
2. 辺野古新基地建設を断念すること
3. 普天間基地は「本土」に引き取り、日本全体で問題解決すること

最後に、新聞記事にあった大正区の沖縄県人会長の話を借りたい。「沖縄復帰50年、この節目に多くの方が沖縄に注目して欲しい、沖縄をもっと理解して欲しい。そして、基地が今後も沖縄にある事が当然と思わないで欲しい。もう一度沖縄との関係に出会い直してもらいたい」。

第9分科会

知られざる沖縄戦後史

山田圭吾（那覇教区信徒）

1972年5月15日、沖縄の施政権がアメリカ軍から日本に返還されました。今年は50年目の節目を迎えるとあって、さまざまな観点から戦後の沖縄を振り返る活動や日本復帰を記念する行事が数多く執り行われています。

ドルから円へ、右側から左側通行へ、日本との往来がパスポートを必要としなくなり、多くの変化に戸惑いながらも意識的にあるいは無意識に日本への同化を進めてきた沖縄。そのような中で忘れられている、あるいは隠されている歴史の一つが「私宅監置」制度です。

1900年に制定された「精神病者監護法」によって、座敷牢や敷地内外に作られた小さな「監置小屋」に精神病者を隔離した事実がありました。「治安維持」を目的とし、知事の許可を受けて人権など配慮されず閉じ込めたのです。

明かり取りのための小さな穴を開けた壁に囲まれた畳三枚ほどの狭い



「監置小屋」跡（沖縄島北部）

小屋の中で食事や排泄もしなければならず、小屋によっては立つこともままならないほどの高さしかなく、出されたときは歩くこともできなかった人や、中には死んでからしか出ることができなかった人もいました。

「家畜のほうはまだまし」と言われたほどの劣悪な環境は、あまりにもひどいということで、戦後すぐの1950年に廃止されましたが、日本から切り離されてアメリカ軍統治下にあった沖縄では、日本国憲法の埒外に置かれ日本の法律が適用されなかったため、琉球政府によって1972年まで継続されていたのです。

日本では「もはや戦後ではない」として景気発展に浮かれていたころ、沖縄の精神病者の増加率が日本に比べ格段に多かったとの調査結果は、沖縄戦による過酷な体験が、生き残った人たちに如実に表れています。

本人も家族も誰も悪くないのに法律で隔離した制度は、当事者の自己責任にされ、自助、共助、公助を謳う国策の犠牲とされてきました。そして目に見える隔離は無くなったとはいえ、障がい者への、そして沖縄への差別・虐待は今も続いています。

＜お詫びと訂正＞

時報5月号6面「平和旬間の参考に」一覧表「沖縄平和祈念資料館」の電話番号に間違いがありました。お詫びし、訂正いたします。

（誤）03-3202-3844 → （正）098-997-3844